

1 「教師になってやってみたいこと」

「教師になってやってみたいこと」

(家政学部被服学科 令和7年3月卒業)

教師になってやってみたいことは、たくさんあります。担任や部活動の顧問、学校行事など、自分が中高生だったころ、楽しいと思ったことを、今度は支える立場として生徒が良い学校生活を送れるようにサポートしていきたいと思っています。日々生徒の成長を近くで見守ることができると思うと、想像するだけでワクワクします。

特に私がやってみたい、やり遂げたいことは、生徒が自立した生活を送れるような家庭科の授業をすることです。家庭科は、受験科目に関係なく、中学校では技術科と合体した教科であり、家庭科を学ぶ意義がわからないと思っている生徒は多くいます。ボランティア先の中学校では、家庭科をなぜ学ばなければいけないのか感じている人がほとんどでした。現在ライフスタイルが多様化している背景から、生徒自身の人生ですから正解というものはないと思っています。だからこそ家庭科の授業では、生徒自身が選択し、より良い生活を送れるような、多くの選択肢を生徒に与えていきたいと思っています。例えば、被服実習では、トートバッグを作れるようにすることが必要なわけではありません。トートバッグを作る過程における、まつり縫いやボタンつけなどの細かな技術が、今後の生活で生きてくると思います。気に入りのジャケットのボタンが外れてしまった時、ボタン付けができれば、より長く着用し続けることができます。気に入った商品があったが裾が長く裾上げが必要な時、お金を払いお直しをしてもらうのも1つの方法ですが、自分でまつり縫いができれば、お金を払わずに、かつすぐに着ることができます。このような生活の選択肢を広げられるような授業を作っていきたいと思っています。そういった授業を考える上で、生徒が楽しいと思える授業にしたいと思っています。

また、生徒との関わりを大切にしていくこともやってみたい事の1つです。授業だけでなく、行事やホームルームや休み時間など少しの時間でも、生徒と会話ができる時間を大切にコミュニケーションを取りたいと思っています。

他にもまだまだやってみたいことはたくさんあります。憧れの先生を追いかけるだけでなく、私らしい“先生”を確立できるように、試行錯誤しながら頑張っていきたいと思います。

「教師になってやってみたいこと」

(文学部日本文学科 令和8年3月卒業)

私は、「一生懸命はかっこいい」ということを伝えることができる教師になりたいです。この言葉に初めて出会ったのは中学2年生の時で、学年のスローガンでした。中学生の頃が一番大変で辛かったけれど、何事にも一生懸命に取り組んでいたからこそ味わうことができた感動もあり、それを「見ていてくれる人がいる、気にかけてくれる人がいる」と感じることもできたおかげで強くなれたという経験があるからこそ、「一生懸命はかっこいい」ということを言葉で、行動で示すことができる教師になりたいです。そして、学生の頃に体験したさまざまな感情を、教師という立場で味わってみたい、生徒と共有したいという願望があります。

さらに、私が理想とする教師像はもう一つあります。それは、「一生懸命な生徒にこそ気を配り、褒めたり感謝を伝えたりすることを忘れない」教師です。私は小学生の頃からいわゆる真面目な生徒で、先生に気にかけてもらっていると感じたことはほとんどありません。そのため、教師になったら「自分のような生徒」のことこそ大切にしようと思っています。生徒の些細な変化に気づき、声をかけることができる教師、悩みを打ち明けてくれた時はその思いを受け止め、向き合うことができる教師、自分の言動は生徒に大きな影響を与えるということを自覚し、言葉に責任を持つことができる教師、そして学び続けることができる教師を目指し、励んでいきます。

教師として働くようになったら、やりたいこと、できないこと、理想と違うことなどが様々あると思います。その

ため、まずは教師の大変さを感じる事が目標です。今は漠然とした不安を抱えているけれど、やってみないと分からないことはたくさんあるので、まずは少しずつ頑張ってみようと思います。

ずっと教師になりたいと思っていたこと、こんな教師になりたいという気持ち、これからも大切にし続けたいと思っている感情を忘れずに、教師生活の一步を踏み出してみようと思います。

「教師になってやってみたいこと」

(文学部日本文学科 令和8年3月卒業)

私が「教師になってやってみたいこと」は2つある。まず1つ目は、生徒が高校生活を送る上で生徒それぞれが自分の目標を見つけ、それに向かって進んでいけるようなサポートをすることである。私が高校生の時、自分の進路について悩んでいた際に、先生がどのように進路を決めたのかという当時の体験談や、実際に大学で学んでいたことや日々の大学生活などを交えながら、親身になって対応して下さったことがある。この経験から私も、授業内や、ホームルームなど日常のコミュニケーションを大切に、その生徒について理解を深め、生徒が自分で設定した目標に向かっていく過程を見守りながら、サポートできるような教員になりたいと強く思うようになった。そのために、私は「国語」という教科を通して自分の考えを持ち、深め、自らの言葉で相手に考えを伝えることができる力が身に付くような指導ができるように努めていきたいと考えている。また授業以外の場面でも、生徒に明るく前向きな言葉をかけ、生徒の自信に繋がるようにしていきたい。

2つ目は、いつか母校に帰って生徒たちの指導をすることである。教育実習では、実際に通っていた母校である高校で実施させていただいた。自分が高校生だった頃に通っていた学校で、生徒という立場ではなく指導する立場として関わることは、とても新鮮で貴重な経験となった。自分が当時、「将来は教員になりたい」という目標を持った場所でもあるので、経験を積み、教育実習生という立場ではなく教員という立場として、いずれは母校で指導をしたいと考えている。

4月からいよいよ教員として教壇に立つことになるが、教員として自分が生徒にしてあげられることは何かを常に問い続け、生徒だけではなく自分自身も目標を持って働いていきたい。上手くいくことばかりではないかもしれないが、責任を持って指導し誰からも信頼してもらえるような教員になれるように努力し続けたい。

「教師になってやってみたいこと」

(家政学部食物学科食物学専攻 令和7年3月卒業)

私は教師になって、想像力を相手にも自分にも働かせられる生徒を育てたいです。

そのために、①苦手なことも武器になることと②自分の意見をもつ方法の2点を伝えていきたいです。

①苦手なことも武器になる

大学では、授業の他に病院や特別支援学校へ実習に行きました。その中で、次の日の献立を楽しみにして明日も生きようと頑張る緩和ケア中の患者さんや、車いすで一生懸命学校に通う生徒など、明日をどうやって生きるか考え、毎日一生懸命に生きている人々を目の当たりにしました。そこで、今まで「どうせ無理」と挑戦してこなかったことに挑戦してみようと思えました。私は、人前で話すことも苦手ですし、勉強も運動も得意ではありません。ですが、苦手なことがある＝生徒の悩みを理解できることだと思い教師を目指すことを決めました。教育実習を通して、生徒が毎日挨拶してくれたり、楽しそうに話してくれたり、たとえ授業が完璧でなくても生徒や先輩の先生方がサポートして下さったり、挑戦してよかったと思えることばかりでした。このように、苦手なことも武器になるように、誰にでも必ず魅力があることを伝え、生徒が自信をもてるような言葉がけをしたいです。

②自分の意見をもつ方法

私が高校の教師を目指す理由の一つに進路指導があります。そこで生徒に自分の意見をもつ方法を伝えたいです。それは、人の話を真剣に聴くことです。自分の意見とは合わなくても、先生や外部講師、テレビ、YouTubeなど自分の身近な人の話をまずは聴くことです。そして、それに対して自分はこう思うと意見をもつ癖をつけると、ただぼーっと聴くだけとは大きな差になります。反対に、誰かが言語化した話に共感したらメモを残しておくことをおすすめします。そうすると、いつか自分の意見を言葉で表現しなければならないとき（面接や小論文など）に必ず役立つことを伝え、ものの見方を広げられるようにサポートしたいです。

以上のことを通して生徒の想像力を育て人生が豊かになるようにサポートしていきたいです。

「教師になってやってみたいこと」

(家政学部児童学科児童教育専攻 平成29年3月卒業)

私は子どもの可能性を引き出し、未来を生きる子どもたちの力になれる教師になりたいです。

なぜなら、私は小学校3年生まで友人関係が上手く築くことができず、何事にも消極的でした。そんな私に担任の先生が「あなたはみんなを引っ張っていける力を持っているのだから、もっと自分に自信を持ちなさい」と言って下さいました。自分自身が気づいていなかった新たな私の長所を見つけて下さった先生との出会い。私はこの先生との出会いのおかげで人生が大きく変わりました。この恩師との出会いにより、「私は将来教師になり、今度は私が子どもの可能性を引き出し、未来を生きる子どもたちの力になりたい」と思ったからです。

大学生活を通して、子どもの可能性を引き出すためには、どうしたら引き出せるのか常に考えながら学んできました。大学の授業やボランティアでは、多くの小学校に行き、たくさんの先生方や子どもたちと触れ合うことができました。そんな中で、素晴らしい先生の授業をみる機会を得ました。その先生の授業は、初めて見た時から子ども一人ひとりをきちんと理解されているのがとても伝わってくる授業でした。授業を受けている子どもは、どの子も一心に考え、のびのびと発言し積極的に学んでおり、45分の授業はとても短く感じるものでした。45分集中して学ぶことができるのは、教師がこの授業で一人ひとりに何を身につけさせたいかが明確に考えられているからだと思いました。そのため、授業が終わった後「どうしてあの場面でAくんを指したのですか？」と質問しても、その子の背景まで理解された返答が返ってきました。子どもに確かな学力をつけるためにも、誰に何を聞かれても理由が述べられる授業作りをすることで、子ども一人ひとりに合った授業をすることができるのだと改めて確信しました。子どもの新たな可能性を引き出してあげるためにも、教師は日頃からあらゆる場面で子どもとコミュニケーションをとり、児童の背景までも理解していくことがとても大切だと思います。

今の世の中の子どもたちは、未来が不透明であり、夢を持つことや目標を持ち突き進んでいく意欲が持ちづらい世の中になってきています。だからこそ私は、子ども一人ひとりと正面から向き合い、児童一人ひとりを理解し、6年間の中で多くの経験をさせ、その中で自分では気づいていない新たな可能性を引き出してあげたいです。教師は、1日の中で長い時間子どもと関わることができます。だからこそ、一人ひとりを知ることができ、新たな可能性を見つけ引き出してあげられるのだと思います。その子にとって出会った先生は、一生先生です。一人でも多くの子どもの可能性を引き出し、未来を生きる力になれる。そんな教師を目指したいです。

2 [教育実習]

「教育実習を経験して」

(千葉県 市立高校)

私は母校の高校で、6月に国語科（1学年現代の国語）の教育実習をさせていただきました。実習初日から教壇に立ち、全21時間授業を行いました。他にも、担当クラスのHRや、板書案や略案の作成・提出、副教材の作成、実習日誌の記入、ノートチェック・評価、漢字の小テストの成績転記、まとめプリント作成、掃除、部活動の指導等、とにかく多くの業務をこなしました。部活動の関係で、夜は20時頃に帰宅、朝は6時に家を出るような3週間を過ごし、大変ながらもやりがいを感じつつ楽しく実習を終えることができました。そんな中で私が気付かされたのは、「効率化された丁寧な仕事」が必要となってくるという事です。私の教科担当の先生は、まだ小さいお子さんが居たので定時よりも早くご帰宅されていましたが、日中にやるべきことを確実に終わらせていました。先生を観察すると効率化された丁寧な仕事を行うための工夫がいくつか見えてきました。1つ目は、「1日の流れをざっくりとメモしている」ことです。視覚化することで、どこで時間が確保できるのか整理されていました。2つ目は、「やるべきことをリストアップする」ことです。リストアップしたものを1日の流れに組み込むことで、やり残しがない丁寧な仕事ができるのだと感じました。先生方は、私のためにたくさんの資料を準備してくださったり、教科の指導に限らず、私の癖や苦手な部分の指導をしてくださったりと、様々な面で多くの事を学ばせていただきました。私は忘れっぽいところもありますが、先生方のように効率化された丁寧な仕事を行い、自分の時間と信頼の両方を得れるような教員になれるよう、今後も励んでいきたいと思います。

(文学部日本文学科 令和7年度教育実習)

「教育実習を通して学んだこと」

(北海道 道立高校・国語)

私は母校の高校で教育実習をさせていただきました。教育実習の3週間を振り返ると今は「楽しかった」と言えますが、教育実習を終えたばかりの頃は「辛かった」と思っていました。その理由としては、自分の未熟さや勉強不足を教育実習で痛感したからです。最初はできなくて当たり前かもしれませんが、教育実習の中で、「もっとこうしたら良かった。」「もっとこうするべきだった。」と毎日反省を繰り返していました。しかし、指導担当の先生のおかげで最後まで授業をすることができました。実習校の先生方はとても優しく、研究授業の時は教室に入りきらないくらいの先生方が見に来てくれて「頑張ったね」と言ってくれました。どの先生からも自分の為になるお言葉を頂きました。感謝しかありません。

教育実習では、主に授業、教材研究、授業見学、朝と帰りのホームルーム、清掃指導、日誌のコメント記入をしていました。できるだけ、控室にはいないようにしていましたが教材研究や授業の反省会などがあり、控室にすることが多くなってしまいました。

最初の週はとても1週間が長く感じました。慣れていない環境で過ごすのはとても大変でした。しかし、2週間目はあっという間でした。1週間で慣れてしまったのかあっという間に金曜日になっていて驚きました。最後の週は研究授業があるため、その準備に追われていました。帰る時間もどんどん遅くなっていきました。とても大変だったけれど頑張れたのは一緒に教育実習をしている教育実習生たちのおかげです。高校時代のクラスメイトたちも教育実習生として母校に来ていました。知っている人だからこそ支えあえた部分があります。授業の進行や反省、生徒の情報共有を教育実習生たちでしていました。その中で学んだのは教員同士の情報共有の大切さです。教育実習生同士で生徒の事や授業の事について情報共有をしていたからこそ救われた部分もあります。教員になっても情報共有はとても

大切であると学びました。

私は生徒と何気ない話をする時間が一番楽しかったです。その時間があつたからこそ教育実習を頑張れたのだと思います。そして、最後の日に色紙をプレゼントしてくれました。そこに書いてあつた言葉でとても印象的だったのが「先生の授業が楽しかったからまた先生として戻って来てほしい。」という言葉です。とても嬉しく、この言葉を見てさらに教員になりたい思いが強くなりました。

(文学部日本文学科 令和7年度教育実習)

「教育実習を終えて」

(埼玉県 市立中学校・英語)

私は、母校の中学校で教育実習に参加させていただきました。三週間の実習は、大変有意義で充実したものとなりました。教科指導と学級指導の二つの視点から、実習について振り返りたいと思います。

教科指導については、主に三学年の外国語科の授業に入りました。第一週目は英語での自己紹介や部分指導を、第二週目から第三週目にかけては授業実習を行いました。また、第三週目には外国語科と特別の教科道徳の研究授業を行いました。三学年は五クラス編成のため、外国語科の授業が数多く設定されていました。そのため、入る授業数も自ずと多くなり、とても勉強になりました。特に、クラスごとに学級の色があることを実感し、目の前の生徒の実態に合わせて指導をしていくことが大切だと改めて思いました。また、空き時間が一日につき一コマあつたので、先生方をお願いをして、三学年の他教科と他学年の外国語科を中心に授業見学をさせていただきました。授業見学をすることで、外国語科の授業では見られなかつた三学年の生徒の姿を知ることができてよかったです。加えて、同じ外国語科の授業でも、各学年の発達段階を踏まえて、扱う教材やワークシート、指導の仕方、声のかけ方を変化させていることがよくわかりました。担当した三学年の生徒は、日が経つごとに主体的に授業に参加してくれる姿が多く見られるようになりました。生徒がよく授業を聞く姿、生徒からの自発的な挙手や質問等、その全てが嬉しかったです。

学級指導については、教科指導と同じ指導教諭の先生についていただき、その先生が受け持つ三学年の学級に入りました。第一週目から生活記録の点検を行い、第二週目以降は朝の会や帰りの会、給食指導なども行いました。学級指導では、生徒と様々な手段で積極的に関わることの大切さを学びました。休み時間や下校指導時において生徒と話すことはもちろん、生活記録でコミュニケーションをとること、朝の職員会議前に黒板に挨拶を書くこと等、一つひとつの生徒との関わりがよりよい信頼関係の構築に繋がると感じました。特に、何気なく書いていた朝の挨拶について、ある先生から「黒板の挨拶を消そうとすると悲しそうな反応をするから、なかなか消せなかつた。」と聞いた時には、胸がいっぱいになりました。実習の最終日には、生徒から色紙をプレゼントしていただきました。色紙は、机の上に飾っています。一生ものの宝物です。

三週間の教育実習を終えて、教職への憧れと夢を叶えたい気持ちがより一層強くなりました。私のことをあたたかく迎え入れてくださった母校の生徒の皆さんと熱心にご指導してくださった先生方に感謝の気持ちでいっぱいです。教育実習を通して学んだことを将来に活かせるよう、今後も励んでいきたいと思います。

(文学部英語英文学科 令和4年度教育実習)

「教育実習で見えたもの」

(東京都 市立中学校 理科)

教育実習の3週間は、生徒と実際に関わることができるからこそその楽しさと不安が常に入り乱れるような日々でした。

教科指導では、1回の授業で教える量、クラスを巻き込んで授業をどう盛り上げるかが特に難しいと感じました。

何度も模擬授業を大学でやってきたとはいえ実際に30人の生徒を目の前にすると、身が引き締まる思いでした。自分では分かっている内容を、初めて学ぶ人に分かりやすく伝えるにはどうしたら良いのか。1回の授業で扱う量のさじ加減は大事なことはもちろん、その時間内での緩急の付け方はクラスの盛り上がりにもつながります。あるクラスでうまくいったからと言って、全クラスでうまくいくとは限りません。クラスの雰囲気に合わせた微調整は難しいですが、がっちりとはまったときの達成感は大きかったです。

また、毎時間一言でもその授業について振り返りをさせることは、生徒の理解度が見えてくるだけでなく、自分自身の授業の進め方を考えるきっかけになりました。

生徒指導では単純に注意をするだけでは終わらせず、その先、生徒が自分から考えて行動できるようにするために何をすべきか、ということ意識していました。状況に合わせた声のかけ方や、毎回同じにならないようにするにはどうしたら良いかなど、瞬発力と思考力が同時に試される瞬間でもありました。3週間という短い期間の間でも、自分の声のかけ方次第でクラス、学年の雰囲気がだんだんと変わっていくのを実感したときは自分が発するひとつの重さはもちろん、教員の面白さを垣間見られたように感じました。

研究授業の終了後、それまでの授業とはまた違った緊張から解放された安堵感で涙がこぼれた時、教科指導の先生にかけて頂いた「それはこの期間、生徒に全力で向き合ってきた証拠」という言葉は、不安に思うことが多かった私にとって自信につながるものでした。教育実習は毎日が刺激的で、現場に行くからこそ見えるものに全力で取り組んだ日々は、一生忘れられない経験になりました。

(社会情報学部社会情報学科環境情報学専攻 令和4年度教育実習)

「教育実習の流れ」

(埼玉県 市立小学校)

教育実習では、まず1番に体力が重要となります。実習中は、7時頃に家を出て、帰りは早くても、5時くらいとなります。それまで動き続けます。座る時は給食を食べる時だけの時も、多々ありました。

1日の流れは、【朝の準備→朝の会→1時間目から4時間目→給食→掃除・お昼休み→5. 6時間目→帰りの会】という流れでした。

「朝の会」

基本的に、朝の会の前の宿題チェックから入りました。何日か経ち慣れてきたところで、朝の会を任せてもらえるようになりました。朝の会は基本的に「短く・わかりやすく」を意識しました。朝の時間は忙しく、1時間目の授業が迫っているので少しでも早く終わらせることができるように心掛けていました。

「授業」

授業では、はじめは机間観察を行います。その中で困っている児童や、つまづいてしまっている児童にアドバイスなどを行います。教室の後ろに立ち、どのように授業が行われているのかを常にメモしていました。この時に板書も大まかに書いておくと、参考にできるのでおすすめです。

実際に授業をさせて頂く時には、なるべく担当クラスの流れを大切にしていました。その先生、そのクラスのやり方があるので授業の流れを日々注目します。また、流れを担当教員に確認するなど事前準備を必ず行うことが大切です。自分が前に立ち授業を行った際に、児童が理解出来ていないようだったら無理に進まず、少し戻ってみたり、少しヒントを出したりとゆっくり行う時間も意識しました。

「休み時間」

思っているほど、児童と過ごすことは出来ませんでした。実習のはじめの方は過ごせることもありましたが、授業をさせて頂く時はその授業準備に時間を使ってしまうことが多く、遊べる回数が減ってしまいました。しかし、隙間時間を見つけ、児童とのコミュニケーションを取ることを意識することは毎日心掛けました。休み時間は、本気で遊んで問題ありませんでした。児童も本気で来てくれるからです。一緒に楽しい時間を過ごすことが出来ました。

「給食・掃除」

児童と一緒にいることができる時間なので、積極的に動くことを意識しました。この時間はみんなと一緒に全力で用意や片付け、掃除を頑張ります。

「帰りの会」

全員をしっかりと見送ることが大切だと改めて気がつくことが出来る時間でした。

帰りの会の後は、教室の整理整頓、明日の予定の確認、授業準備など学校によって流れは違いますが忙しいという印象があります。

このような流れになっています。

学校の先生にたくさんのことを学ぶことはもちろんですが、児童から学ぶこともたくさんあります。先生方に頼り、たくさん聞くことは本当に大切です。わからないことはそのままにせず、すぐに聞くことが大切です。時には児童からアドバイスをもらうということもしました。

4週間とはじめは長く感じるかもしれませんが、慣れてくると本当にあっという間です。頑張ってください。応援しています。

(家政学部児童学科児童教育専攻 令和4年度教育実習)

3 [介護等体験]

「介護等体験を通して学んだこと」

全ての生徒に寄り添うことができる教員、これが私の目指す教員像です。特別支援学校での2日間は、生徒に寄り添うとは何かを深く考えるきっかけになりました。

生徒たちにとって、着替えや給食の準備、移動など、日常生活そのものが学習の一部になっていました。1クラスの生徒数が少なく、担任が複数いることで、生徒たちと常に近い距離感にいました。このような環境から、生徒を理解することの大切さに改めて気付くことができました。生徒によって個性が大きく異なっています。教員は、得意分野で生徒が目立てる活動を取り入れたり、発達の段階に合わせ授業内容を決めたりしていました。生徒が楽しく主体的に学んでいる姿が印象的でした。生徒が楽しく主体的に学べる環境を作るには、教員の生徒に興味を持たせる工夫や、ポジティブな声かけが不可欠であると気づくことができました。短い期間でしたが、生徒ができるようになったと喜ぶ姿を見たときや、生徒の成長を感じられたときに、教員として働くことの魅力を実感することができました。同時に、教員が生徒に与える影響の大きさを感じました。現場の教員の方々は、生徒の小さな変化でも情報を共有し、より良い指導を行うためには何をしたらいいのかを考え続けていました。責任感を持って熱心に生徒に向き合っている教員の方々に感銘を受けました。

特別支援学校は生活指導や授業をはじめとした全てが生徒との対話でした。生徒の目線で考えることの重要性に気付きました。また、学校は勉強を教えるだけでなく、社会で生きていける力を身につける場であることを再認識しました。通常学級でも生活や学習に困難を抱える生徒はいます。その生徒に気づきサポートをしていくことが、教員には求められます。介護等体験で学んだ、一人ひとりの生徒の目線に立ち、対話をする、そして責任感を持ち生徒に熱心に向き合うことを大切にしながら、今後活かしていきたいです。

(文学部日本文学科 令和6年度〈特別支援学校〉)

「介護等体験を通して学んだこと」

2年生のときに介護等体験を行う予定でしたが、新型コロナウイルスの影響で動画や資料を通して学びました。3年生では、特別支援学校で2日間の体験をさせていただき、とても貴重な経験になりました。

私が体験させていただいた学校では、配属されたクラスの担任の先生と校内を案内してくださった先生が異なっており、複数の先生方と関わる機会がありました。先生方はお忙しい中でも優しく接して下さり、分からないことにも丁寧に答えてくださいました。しかし、私たちに関するすべての連絡事項を先生方が把握しているわけではないため、自分で確認したり、不安なときは質問したりするなど、自己管理が大切です。

先生方との関わり方だけでなく、児童との関わりの中でも意識していたことがあります。私がお世話になったのは、4、5人の6年生が在籍するクラスでした。児童は素直でコミュニケーションをとりやすかったです。しかし、それぞれ発達の段階が異なります。一人ひとりに寄り添えるよう、優しくはっきりと相手のペースに合わせて話すように心がけました。

こうした体験を通して、学んだことは大きく2つあります。

1つ目は、できることは自分でさせることの大切さです。生徒が自立するためには、なるべく自分でできるように促す必要があります。支援する時と見守る時の判断が難しく、先生方に助言をいただきながら関わるようにしました。

また、先生同士の連携も重要で、一人ではクラスの児童全員の状況を把握することはできないため、他の先生方との情報共有や協力が欠かせないことも学びました。

特別支援学校については分からないことも多く、最初は不安を感じていました。しかし、2日間の体験は思ってい

た以上にあつという間です。大変なこともあります。特に児童との関わりは楽しく充実した時間を過ごすことができました。この経験で得た学びは、特別支援学校に限らず、通常の学級でも生かせることが多いと感じています。

また、特別支援学校では先生としての振る舞いが求められます。介護等体験の際には、外部の方からも先生として接していただきました。これから体験に行く皆さんも、積極的に学ぼうとする姿勢と、先生であるという意識を持って取り組んでみてください。

(文学部日本文学科 令和6年度介護等体験〈特別支援学校〉)

「介護等体験を通して学んだこと」

私は介護等体験として、2年生の時に福祉センターの中にある障がいのある方が仕事訓練をする施設に5日間行きました。3年生の時には、特別支援学校に2日間行きました。

①福祉センター

私は、就労継続支援B型の方が仕事する場所に配属になりました。就労継続支援B型という言葉をはじめて知りました。介護等体験の前に何も知らないままで体験を行うことは、失礼と考え、障がいについてのことや就労継続支援B型について様々なことを調べていきました。5日間の体験内容は、施設利用者の方と、福祉センターが請け負っている割り箸の袋詰めをしたり、センターが経営しているパン屋さんの掃除をすることでした。また、お昼休みには昼食を一緒に食べました。話をするときには、話をする、仕事をするときは仕事をするという、施設利用者の方にメリハリをつけるのが難しかったです。この活動を通して、プラスの声かけというのを考えながら関わるのが大切であると学びました。

②特別支援学校

現場でしか、体験することができないことをたくさん経験することができました。普段の生活の中で障がいがある方と接する機会は、ほとんどありません。前日は大変緊張しましたが、当日は充実した日になりました。

特別支援学校とは、名前は知っていましたが、どのような学校なのかよくわかりませんでした。私は、体験前に必ず特別支援学校とはどういう学校なのか、どのような障がいがあるのかというのは、きちんと調べておいたほうがいいと思います。そして、当日、担任の先生にクラスの生徒がどのような障がいがあり、どのような接し方をすればいいのかアドバイスを聞き、先生と介護等体験生との、情報交換を綿密にすることをおすすめします。生徒は、介護等体験生であっても、先生という認識をしています。先生が、不安がっていると、生徒も不安がってしまいます。私が経験したことかというと、1日のスケジュールがしっかりしていないと活動ができない生徒がいました。私が、1日のスケジュールを把握していなかったため、生徒が「次、何をしますか？」という質問に私がすぐ答えることができなく、不安にさせてしまったことがありました。あの時私ができたことは、おどおどするのではなく、黒板に1日のスケジュールが貼ってあるので、一緒に見に行こう！という声かけができればよかったと思いました。一つの言葉であっても、視点を変えて、プラスの言い方に変えていく力が大切であると思いました。

最後になりますが、必ず目標を立てて、介護等体験に挑むことが必要です。私は、①「発語がない方でも、諦めずにコミュニケーションを取る。」②「施設利用者の方や生徒が1人でできることは、最後まで手を出さずにやり抜くまで見守る。」③「どんな時でも笑顔で明るく！はきはきと！」というこの3つを目標に掲げて、2つの介護等体験を行いました。いろいろなことを頑張ろうとすると、自分が大変になります。五感を働かせて、たくさんのことを吸収してください。現場の辛さ、楽しさなど、様々なことを経験することができます。

{ 文学部英文学科 平成27年度介護等体験〈社会福祉施設〉
平成28年度介護等体験〈特別支援学校〉 }

4 [教員採用試験]

「教員採用試験を終えて」

(新潟県・中高・家庭)

こうして体験記を書けることをとても嬉しく思います。私は新潟県の教員採用試験を受験し、合格することができました。これから採用試験を受験するみなさんへ、受験しようか迷っている方へ、何か伝えることができれば幸いです。

私は大学入学当初に“新潟県の教員になる”という目標を掲げました。この目標達成に向けて努力する中で、私に教員なんてできるのだろうか、生徒に家庭科を教える事ができるのだろうか、自分に自信がなくなり教員になることにどこか迷いが生じ、不安になることもありました。しかし、教員になって大好きな家庭科を教えたい、子どもと関わる仕事に就きたいという思いは、4年間失せることはありませんでした。教員採用試験合格までの道のりは、短いようでとても長かったです。

私は校外実習を終えた3年生の2月から本格的に採用試験の勉強を始めました。初めて解いた過去問は3割しか解けず、とても落ち込みました。とにかく毎日毎日勉強を重ね、基礎を身に付けていきました。時には諦めかけたり、くじけそうになる時もありました。そんな時、私の心の支えになったのは同じ目標に向かって頑張る教職組のみなでした。一緒に大学に通って勉強することや、お互いに問題を出し合ったりし、みんなで高め合っていました。教職総合支援センターの先生方にもたくさんお世話になり、小論文の添削や実技試験対策、面接の対策等を行って頂きました。仲間や先生方、応援して下さる方々がいて、私は一人じゃないと思えたことがとても心強かったです。

教育実習では実際に生徒と関わり、授業づくりの工夫や学級経営について学びました。教育実習最終日に生徒が、“先生の授業で初めて家庭科が楽しいと思えた”と言ってくれたことは、とても嬉しく絶対に教員になると決意した瞬間でもありました。

最後まで頑張れたことは、新潟県の教員になりたいという強い思いと、同じ目標に向かって頑張る仲間がいたからだと思います。全ての方々に感謝の気持ちを伝えたいです。これからは残り少ない大学生活を充実させるとともに、教員としての準備を進めていきたいです。

これから採用試験を受験する方や、受験しようか迷っている方、自信を無くしたり不安に思うこともあると思いますが、たくさん悩んで自分の将来を決めてほしいと思います。いつか同じ教員として一緒に働けることを楽しみにしています。頑張ってください！！

(家政学部食物学科食物学専攻 令和6年3月卒業)

「未来の同僚の皆さんへ」

(新潟県・小学校全科)

「3月28日」忘れもしない、わたしが教員採用試験対策の勉強を始めた日である。春休み明けのガイダンスの日、「もう4年生か…」などと安易に考えていた私の目に飛び込んできたのは、参考書や問題集を眺めるクラスメート達の姿だった。そこから、私の教員採用試験対策が始まった。後輩の皆さんには、私のような失敗をしてほしくないのので、僭越ながら、以下に2点のアドバイスをしたい。

1点目は、勉強をする覚悟をすることである。「教員採用試験は時の運」とよく言われるが、最低限の学力がなければ運を味方につけることさえできない。私はまず、自分が集中して勉強できる場所(私の場合は大学)を見つけ、そこにこもって1冊の問題集(セサミノート)をひたすら繰り返した。ただ、私の失敗は最後まで受験する県を決められなかったために、オールマイティに勉強するしかなかったことである。もっと早く受験する県を決めていたなら、

それだけ早くその県の傾向に合わせて勉強することができたと思う。実際に勉強して実感したことだが、その県によって絶対に出題される問題や全く出題されない問題などがはっきりしている。すべてを頭に入れる必要はなくピンポイントに勉強すれば、解くのは問題集の3分の1程度でよい。

2点目は、小論文や面接の指導をしてもらえる人を見つけることである。一人でコツコツ問題を解けばよい勉強とは違い、小論文や面接は適切な指導者がいなければ対策を立てることができない。私は、大学の先生や理科支援員としてお世話になっていた小学校の校長先生などに指導していただいた。指導していただいているうちに、小論文や面接に関しては得手不得手よりも練習量だと痛感した。論文の形式をつかむまでは書くよりほかにない。面接で語れるだけの教育経験を積むには、様々なボランティアをするなどして経験するしかない。大学生活で自分が語れる引き出しをたくさん作り、それをうまく引き出してくれる指導者に協力してもらうことが大切である。

このように考えると、自分が非常に大層なことを成し遂げたかのようなのだが、担任として子どもたちを預かる立場となった今振り返ると、試験対策だけで努力していると感じていた自分が恥ずかしい。それだけ、クラス担任は忙しく辛いことも多い。しかし、その辛さを遥かに凌ぐほどの喜びがあるからこそ、「学校の先生」はやめられない。

(家政学部児童学科児童教育専攻 平成22年3月卒業)

「教員採用試験を終えて —教員採用試験は団体戦—」

(千葉県・小学校全科)

教員採用試験を終えた今、毎日の勉強や試験対策から開放された嬉しさや先生になれる嬉しさもありますが、毎日のように大学で共に勉強していた仲間達に会えない寂しさの方が大きいです。2月から約半年間、互いに励まし合い、助け合いながら将来先生になった時のことを考え、試験対策に取り組んできました。教員採用試験は個人戦と言われますが、私はそうとは思いません。今回は私が仲間達と行っていた試験対策についてお伝えしたいと思います。

私や仲間達が1人で勉強を続けられる性格ではなかったことや、同じ県の教員採用試験を受ける子が多かったこともあり自然と集まって勉強をするようになりました。9時から大学に集まり夕方まで勉強に励んでいました。参考書や過去問を繰り返し解き、分からない問題は互いに教え合い乗り越えていました。互いに先輩や先生方に聞いた情報を交換し、共有していました。教員養成セミナーの問題を解いたり、問題をカードにし通学中に繰り返し行えるようにしました。1次試験の集団討論の練習は、教職支援センターの先生方に指導頂きながら、週に2、3回ほど行っていました。終わった後は、みんなで反省会を行い施策や教育問題について調べたりしていました。当日は初対面の方と同じ組になるため、他学部や他大学の学生と練習をしていました。

2次試験対策では、個人面接の練習で聞かれた質問を共有したり、困った質問をみんなで考えたりしました。模擬授業の練習は、それぞれ実習で行った物を共有しながら、五教科の授業を考えました。授業を見合いながら、協議を繰り返し改善していきました。仲間の授業を見て、良い点を真似し、より良い授業になるように練習していました。

私が頑張り続けられたのは一緒に教員を目指し、努力し続けてくれた仲間達のおかげです。教員採用試験までの約半年間は大学生活の中でとって濃いい思い出です。半年前の1人で頑張らなきゃと思っていた私や、現在教員採用試験を控えている方に、教員採用試験は、個人戦ではなく団体戦であり、一緒に努力してくれる仲間がいることを伝えたいです。不安になった時は、教壇に立ち子供たちと笑っている自分の姿、先生を目指したきっかけを想像し、思い出してください。皆さんは1人じゃありません。皆さんの夢が叶うことを応援しています。

(家政学部児童学科児童教育専攻 令和7年3月卒業)

「教員採用試験を終えて」

(群馬県・中学・理科)

私は、群馬県教員採用試験を受けました。そして合格することができました。学生の私にとって、採用試験に合格することが試験勉強を行う上での目標でした。しかし、合格した今の私は目標を達成することが出来たと同時にここからがスタートであると感じています。

私は高校生の時から教師になりたいと考えていましたが、いざ就職にむけて進路を決め始める頃は、自分が本当に教師になれるのかと不安を感じ、決心するまで心のどこかで迷っている部分がありました。しかし、理科実践演習の講義などを通して理科の教材を作る楽しさや、普段の生活の中でも授業に使えるような写真は撮れないか、話題はないかなど探すようになり、先生になって沢山の生徒に理科の楽しさを教えたいと強く感じるようになりました。

教育実習では実際に生徒と関わり合い、生徒との接し方や授業を行う上での工夫などを学びました。生徒と関わっている時間はとても楽しく毎日が充実していました。3週を終えたときには絶対教員になると思いが強まりました。

試験勉強はとても長い期間でしたが、最後まで気持ちを切らさずやってこれたのは、教師になりたいという強い気持ちと、それに加えて私が一人ではなかったからです。多摩キャンパスの理科教職のメンバー、千代田キャンパスの同じ教員を目指す仲間がいたから私は最後まで勉強を続けることができました。受験は団体戦だとよく言いますが、この意味を初めて理解することができた気がしました。先生方には様々なことを指導していただきとても感謝しています。

私の今の目標は、残りの学生生活を充実させるとともに4月から教壇に立つ立場としてしっかりと勉強して、準備をしておくということです。今からが私のスタートです。

(社会情報学部社会情報学科環境情報学専攻 平成29年3月卒業)

「言葉が持つ力」

(埼玉県・中高・国語)

私は高校を卒業するとき、恩師と「ある約束」を交わしました。その約束を果たせるのは4年後。約束を果たすには、大学4年間で教職課程を制覇すること、さらには教員採用試験に合格しなければいけません。それは、私にとって人生一の挑戦でした。

318時間。

この時間は、私が1次試験にかけた時間です。1日10時間机に向かう日もありました。たくさん勉強したんだぞと自慢したいわけではありません。なぜこんなに頑張ることができたのか、それを、読んでくださっている皆さんにお伝えしたいと思います。

1次では、専門教養、一般・教職教養の3分野が試験内容でした。勉強を始めたのは大学3年生の夏。初めて解いた過去問は4割にも届いていませんでした。「このままじゃダメだ」そう思った私は、出題傾向を把握し、授業やバイトの合間を縫って勉強を始めました。そのうち、不安と焦りから勉強をしていないと落ち着かなくなりました。常に参考書を持ち歩き、遊ぶ時間や寝る時間を削って、勉強をしました。それでも点数は上がりませんでした。試験日が近づいてきた頃、私の頭はネガティブな感情でいっぱいになっていました。「1次で落ちるかも。」周りにもそのネガティブな感情を振り撒いていました。そんなとき、「絶対受かるよ。」隣で一緒に勉強をしてくれていた友達がそんな言葉をかけてくれました。私が不安な気持ちを口にするたびに、明るい言葉で返してくれたのです。いつのまにか「絶対合格する。」そんな強い気持ちを持てるようになっていました。

自信をつけて挑んだ1次試験。自己最高得点を取り、合格しました。

つづく2次試験は、面接、集団討論、小論文が試験内容でした。ほぼ毎日面接練習をし、空いた時間があれば、面

接ノートを見返していました。しかし、ここでも私の不安症は発動しました。「絶対受かる」「大丈夫」「あなたなら
できる」これらの言葉は一緒に戦う仲間やセンターの先生方から頂いた言葉です。毎日投げかけてくださるその言葉
はおまじないのようで、私の心にじわじわと入り込んでいきました。そのおかげで、2次試験も力を出し切り、合格
することができました。

なぜこんなに頑張ることができたのか。

それは、多くの方から言葉の力を頂いたからだと思っています。

「言霊」という言葉を聞いたことがあるでしょうか。言葉には力が宿ります。試験を受けるにあたって、頂いた言
葉たち。「いつか「先生になりました」って絶対報告をしにいきます！」あの日恩師と交わした約束。全て言霊となっ
て返ってきたのだと、私は信じています。不安でいっぱいになった時、「自分ならできる」と声に出してみてください
。必ず力となって自分に返ってきます。

私は、これから出会う子どもたちにも、そして自分自身にも明るい言葉をかけ続けていきたいです。過信はせず、
自分のことを信じること。それがこれからの目標です。

(文学部日本文学科 令和7年3月卒業)